

総務部の丸山さん、  
イケメン社長に溺愛される

## 目次

総務部の丸山さん、イケメン社長に溺愛される

5

総務部の丸山さん、大ピンチを迎える!?

221

総務部の丸山さん、イケメン社長に溺愛される

「うわあ、今日もいい天気だなあ」

アパートの窓から空を見上げて、里美は目を細めた。

「さてと……。今日はなにをしようかな。映画でも観に行こうか、それとも部屋で読書三昧しちゃうか——」

丸山里美、二十五歳。

身長百六十二センチ、体重は五十キロ台の半ばあたりをうろろしている。里美は、ぱっと見ただけではまるで印象に残らない。美人でも不美人でもない、ごく平凡な顔。道ですれ違っても、百パーセント記憶されないだろうし、集団生活においても、空気のようにいるかいないかわからないタイプ——。そんなキャラだ。

「はい、サボ子。今日は一日ここでひなたぼっこしててね」

里美は、ベランダの丸椅子の上に、手に持ったウチワサボテンの鉢を置いた。

「サボ子」というのは、里美がつけたサボテンの名前だ。七年前、大学進学とともにひとり暮らしを始めて、初日に行った駅前の商店街でひと目ぼれしたのだ。最初は丸い葉っぱ一枚だけだった

「サボ子」だけど、今ではてっぺんからふたつの葉を伸ばし、まるでウサギの頭のような姿形にまで成長している。

「せっかくの天気だし、とりあえず洗濯をすませちゃおう」

里美は両手を上げ、思いつき背伸びをした。

気持ちよく晴れたゴールデンウィーク最終日に、スケジュールが空いている人はそうそういないだろう。現に、里美の友人は皆、彼氏とデートだ。対して里美はというと、彼氏いない歴イコール年齢。つまり、今日のような日にデートの予定などあるわけがないのだ。でも、なにもわざと彼氏をつくらずにいるわけではない。ただ単に、縁がなかったというか、これまで生きてきたなかで、これといった人に出会ったことがないだけ。いいな、と思っても、それが好きという気持ちに進化することはなかった。

そんなわけで、おひとり様な里美は特になんの用事もなく、結局、本を読んだり買い出しに行ったりしただけで、一日が終わった。

「サボ子、今日も一日平和だったね」

小さく欠伸をしながら、里美はひなたぼっこを終えた「サボ子」に話しかける。

連休明けの明日は、きつと忙しい一日になるだろう。だけど、忙しいのは嫌いじゃない。

里美は、ベッドにもぐり込むと、「サボ子」におやすみを言ってすぐに深い眠りのなかに落ちていった。

里美が勤務する株式会社「BLANC VERITE」は、今時の若者なら知らない者はいないくらいのも、大手アパレル会社だ。原色を多用したブランドをメインにしつつ、そのほかに八種類のブランドを展開している。ファッション誌には毎号なんらかのアイテムが取り上げられるし、芸能人やモデルにもファンが多い。

デザインは個性的だし、着こなすのも容易ではない、言わば孤高のブランド。だけど、それだけに、熱狂的な支持者がいる——それが「ブラン・ヴェリテ」の業界的立ち位置だ。

社員は私服勤務で、ふだんから自社ブランドをメインに、それぞれが様々な着こなしを楽しんでいる。社員ひとりひとりが、歩く広告塔の役目を担っていると言っても過言ではない。

そうはいつても、里美は入社以来ずっと本社総務部勤務。他部署と比べると、どうしても地味な印象があるし、実際部署内の顔ぶれを見ても、どちらかといえば控えめなヴィジュアルを持つ人材が集まっている。

里美自身もご多分に漏れず、しつかり地味な人材だ。

連休明けの月曜日、里美はいつものようにアパートを出発した。時間は、七時ちょうど。始業は九時半で、通勤時間は約一時間だから、でかけるには明らかに早すぎる。だけど、通勤ラッシュを避けるにはこの時間がベストなのだ。

というのも——

「す、すみません！ 降りま〜す！」

目的の駅で声を張り上げ降りようとしても、あと少しでホームだということ、乗り込んでき

た乗客に押し戻され下車できず。そうこうするうちにそのまま次の駅、そのまた次の駅へと連れていかれることが、何度もあったためだ。結果、電車が混む時間帯を避けて出社するようになった。

華やかな業界に身を置いているとはいえ、里美自身はまるで地味で目立たない。いや、目立たないというより、存在すら認識されないことが日常茶飯事だ。それは、今に始まったことではない。

里美が物心ついたころからそうだし、今ではもうすっかりそれが当たり前になってしまっている。

実家でも、一日中家にいたというのに、家族から「いたの？」と言われることがしょっちゅうあった。行きつけの美容院でも、うっかり眠りこけるまでシャンプー台で放置されたことだってある。バスに乗っていねむりをしようものなら、運転手に気づかれずそのまま車庫に連れていかれてしまう。飲食店に入っても、よほどアピールしなければ店員に気づかれない。

その場においても、まるでいないものとして扱われるのが普通で、里美自身そういったことにもうすっかり慣れてしまっているのだ。

友だちは言う。

「里美って、気配消すの上手いよね」

確かに、気配の薄い人は、世の中に少なからずいる。だけど里美の場合、それが群を抜いているのだ。

社会人になってからも、里美の特性は変わらない。

「丸山さんったら、いるかいなかわからないだもん」

ずっといるのに、いつからそこにいたのかと驚かれる。一度などは、同期の飲み会の席で隣にい

た男性社員に、腰を抜かす勢いで驚かれました。

「うわあつ、びっくりしたあ！いきなりそこにいるから幽霊かと思ったよ！」

「ちょっとそれ、いくらなんでも失礼でしょっ！」

女性社員にたしなめられ、彼は首を縮こめてくりかえし里美に謝罪をする。

「ごめん。ほんと、ごめん、丸山——」

本意ではないが、これまで何度も人を驚かせてきた里美だ。相手の反応にももう慣れっこになっている。

「ううん、いいのいいの！気にしないで。ぜんぜん平気」

相手に悪意がないのはわかっている。それに、自分でも自覚しているからか、里美はこれまで一度も自身の存在感の薄さで嫌な思いをしたことがない。

その後、同じようなことが何度かあり、そのたびにでてる“幽霊”というフレーズは、いつしか里美のうたい文句になっていた。

「ほら、またでた。里美の“幽霊さん”——」

あるとき、同期の女性社員がそう言ったのをきっかけに、里美はごく親しい仲間から“幽霊さん”と呼ばれるようになる。その呼び名は、里美がそれらしいエピソードを起こすたびに少しずつ社内に広まっていった。そして、今ではそれが、親しみを込めた里美のニックネームになっているのだ。

そんな“幽霊さん”里美は、朝一番に出社すると、まずは各フロアを巡回する。

まだ誰もいないフロアに明かりをつけ、総務部員として、備品の過不足をチェックしながら通路を歩く。コピー用紙が切れていたら補充し、照明がちゃんとつくかどうか点検をする。あちこちに点在する観葉植物に水をやり、製氷機の氷がなくなっていないか確認する。全フロアを回りながら、ちまちまとした仕事を丁寧になしていくのだ。

「これでよし、っと」

準備完了——

毎朝の巡回が終わり皆が出社してくるころには、仕事をするのに万全の態勢が整っているというわけだ。

始業時間をすぎると、里美はさらに忙しくなる。

「あれ、ここにあつた研修計画表知らない？」

キャビネットの前で、主任が声を上げる。それなら、さつき課長が閲覧していたはずだ。見ると案の定、用済みになつた計画表が、共有スペースの机の上に放置されている。席を立ち、目当ての書類を手に、後ろを向いている主任に声をかけた。

「主任、これですか？」

「うあつ!?——つと、丸山さんか。おお、これこれ！ありがとう」

脅かすつもりはなかつたけれど、役に立ててよかった。

「おーい、町内会長の沢田さんつて方が受付にきてるらしいよ」

会社のビルが建っている地域では、毎年近所にある神社で夏祭りが行われる。きつと、その関係

で訪ねてきたのだろう。

「はい、私受けます」

受付に向かうと、顔見知りの年輩男性の姿があった。

「——お待たせしました、丸山です」

「ああ、丸山さん！ 今年の夏祭り、また協賛お願いできるかい？」

沢田さんのだみ声を聞くと、ひと足先に夏を感じる。

協賛も毎年のことなので、速やかに必要な手続きをとった。

「第二会議室の空調がおかしいってさ」

部署に戻っても、席につくひまはない。ビル管理の会社に来てもらう前に、とりあえず状況を把握しに現場に行く。

「ロンドン支社から、福利厚生について問い合わせの電話入りました」

ようやく席についたところで、次はロンドン。正直、英語にはまだ大いに不安がある。相手が日本人スタッフであることを願いながら、内線を回してもらおう。

男女合わせて十人の社員がいる総務部では、里美が一番の若手だ。部長の田中を始め、皆真面目でいい人ばかりだけれど、それぞれに抱えている仕事に追われているため、イレギュラーな仕事はどうしても里美がやることになってしまう。

里美は、それらを淡々とこなしつつ、自分が受け持っている仕事を片付ける日々を送っている。だけど、それはまったく苦ではない。入社当初は戸惑いもしたけれど、今ではもう慣れたものだ。

それに、雑用とはいえ、その内容は多岐にわたる。そういつたことを積み重ねているうちに、いっしょに里美にはいろいろなスキルが身についていた。

（あれ？ 今何時だろう）

キャビネットの前にしゃがんだまま時計を見ると、いつの間にか時刻は午後九時を回っていた。

総務部は先月、部署の統廃合にともない四階から役員室のある八階に引っ越しをした。その残務処理の一環としてファイル整理をしていたのだが、集中するあまりつい時間を忘れてしまったらしい。

「ふう……、今日はもう帰ろう——」

ひとり咬き、頭のなかで夕食の献立を考え始める。冷蔵庫の中身を思い浮かべてみるけれど、めぼしい食材は入っていない。

（駅前のスーパーに寄ろうかな？ でも、この時間じゃ、もう特売品は残っていないだろうし。昨日の残りものと、野菜炒めですませちゃうかな）

しばらくの間キャビネットの前でぼんやりと考え込んでいた里美だったが、ふと我に返る。

（つと、帰らないと）

デスクに戻ろうと、立ち上がって思いっきり背伸びをする。その瞬間、フロア中の照明が落とされ、辺りが真っ暗になった。

「えっ……また？」

里美は、天井を見上げる。一応周りに目を向けるけれど、真つ暗でなにも見えないし、誰の気配も感じられない。ブラインドを閉めているから、外から入ってくる明かりは、ほんの僅かだ。

さっきまで何人かの同僚がいたはずだったけれど、いつの間にか退社していらしい。きつと彼らは、里美ももう帰ったと思い、照明を落としたのだろう。ずっとキャビネットの前にしゃがんでいたのだから、無理もない。

(やれやれ、月曜日からこれ? ……ま、いつか)

実のところ、こういうことは、これが初めてではなかった。それどころか、こうして残業をしていると、結構な確率で照明を落とされてしまう。これも里美の存在感のなさがなせる業なのか。今期、すでに二回目。入社してからだと、もう数えきれない。

だから、今のようにオフィスの暗闇のなかに取り残されても、里美は驚かなくなっている。こんなときのために、ポケットにペン形のライトを常備しているのだ。

(あわてない、あわてない——)

暗闇に目をならすために、しばらくの間じつと立ち尽くす。それから目を開けて、ライトのスイッチを入れ、足元を照らし歩きだした。けれど先月引越したばかりで新しいフロアに慣れておらず、なかなか目的地にたどり着けない。

いつも以上にそろそろと歩くつま先に、なにか硬いものが当たった——と思った途端、フロアに鈍い音が鳴り響いた。同時に、ごみ箱らしきものがごろごろと転がる音が聞こえてくる。

(うわっ、しまった!)

幸い中身が空っぽだったらしく、ごみが散らかった様子はない。あわてて転がったごみ箱を探し、ようやく見つけたところで、そこが自分のデスクの前であることに気づいた。

(なあんだ。ちょうどよかった)

里美は、ほっと安堵のため息を漏らした。そして、バッグを持ち、エレベーターホールに向かつてゆっくりと歩きます。途中、何度かふらついてしまったけれど、どうにか無事にたどり着いた。

エレベーターは二台あるが、すでに稼働時間をすぎている。

里美は緑色の誘導灯が示す非常階段のほうに向かった。重い扉を開けると、すっかり慣れ親しんだ柔らかな明かりが、里美の目の前を明るくする。非常階段の照明は、二十四時間消えることはないのだ。

ここまで来れば、もう楽勝。

里美は、余裕の鼻歌を歌いながら扉を閉めた。階段を下りつつ、頭のなかで仕事のことを考える。(そうだ——。社長も代わったことだし、今度また役職者のスケジュール管理ソフトの導入を検討してもらおう)

以前、上司を通してそれを提案したときには、まださほど必要はないだろうとリジェクトされていたのだ。

「だけど、そのうち必要になるときがくるだろうから、そのときにもう一度提案してみてくれる?」

そう言ってくれた田中部長は、やや小太りな五十代前半の男性。いつもにこにこして物腰も柔らかいが、実は社内一、肝が据わっており、ゆくゆくは役員に昇格すると目される有能な人だ。

(今がきつとそのときだよね——)

この四月に、「ブラン・ヴェリテ」の社長が代わった。その新社長の意向で、秘書の人員がだいぶ削られたのだ。そのため、今まで秘書課が担当していた業務の一部が、総務部に回ってきていた。(そうと決まれば、予算があるうちに申請書を出さなきゃ)

頭のなかで申請の文言を思い浮かべる。一階に到着し、取り出したマスターキーでビル全体の施錠を終えた。

このマスターキーを常時持っているのは、管理会社と社長、各部の部長だ。社員が残業するときには、その部長が適宜キーを渡すことになっている。今日総務部のキーを渡されたのは、同僚の男性社員だった。

しかしそれとは別に、里美は特別にキーを持たされている。それは、里美が朝一番に出社するからであり、今回のようなことが何度も起きているからでもある。

「これでよし。今日も一日お疲れ様でした」

里美は小さく頷き、軽快な足取りで駅へ向かっていった。

次の週の水曜日。里美はいつものようにアパートをでて、会社に向かっていた。電車の窓ガラスに映る顔は、いつもながらあまり化粧つ気がない。

たまご形の顔を飾るパーツは、全体的にどことなく昭和を感じさせる。ヘアスタイルも、ごくシンプルなマッシュルームカットで、前髪をやや横に流した形だ。もうずいぶん長いこと、髪型を變

えていない。実際、行きつけのヘアサロンでは、いつも同じオーダーばかりしていた。

(それにしても、顔、薄っ。——自分ながらほんとと、印象が薄いよね)

会社最寄駅に到着し、改札をでる。駅前の人の流れをやり過ごして、上を向いた。空が晴れているだけでなんとなく気分がいい。

自ビルの前に到着して、マスターキーで開錠する。そしてエントランスでちらりと周りを確認してからそのまま足を進め、自動ドアの前で立ちどまった。そこで里美はおもむろに両手を上げ、バタバタと踊る。——いや、正確には踊っているわけではない。だけど、傍ら見たら、へたな盆踊りを踊っているようにしか見えないだろう。

里美とて、なにも好き好んでこんなことをしているわけではない。機械に対しても「幽霊さん」である里美は、こうやって大袈裟に動かないと、センサーが反応せず自動ドアが開かないのだ。

「あれっ？ 開かない……」

いつもどおり動いているのに、今日に限ってドアはびくりとも動かない。どうやら今日は、何日かに一度ある「特に開きにくい日」のようだ。こうなったら仕方がない。里美は、肩にかけたバッグを持ち直し、さらに大きく手を振ってジャンプをした。

「どうだっ！ これでもかっ！」

小声でそう呟きながら、センサーを睨みつける。

だが、自動ドアは、開かずの扉のごとく依然無反応だ。

「ん〜、今日は手ごわいなあ……」

里美は、しまいには蟹のように横歩きをしながら、掲げた掌をひらひらと振った。これは、里美がこの三年間に編み出した、ドアを開けるための最終兵器で――

「おはよう。なにやってんの？」

「ひゃあつ!」

突然背後から声をかけられ、驚いて飛び上がる。振り向くと、少し離れた場所に背が高くがっしりとした体形の男性が立っていた。

「ごめん、脅かしちゃったかな？」

秀でた眉に、すっきりと高い鼻筋。ゆっくりと瞬きをする目は、綺麗な濃褐色だ。

「あつ、しゃ、社長！ おはようございます！」

里美は、一歩下がりが、腰を折って挨拶をした。その拍子にお尻が自動ドアにぶつかる。

「つとと……」

反動で少し前につんのめってしまい、あわてて踏みとどまって顔を上げた。

「大丈夫か？」

少し癖のある黒褐色の髪が、差しこんでくる朝日にきらめいている。

「はいっ！ 大丈夫です」

声をかけてきたのは、「ブラン・ヴェリテ」の社長、桜井健吾だった。自社ブランドのスーツを見事に着こなした彼は、まるでランウェイを歩くモデルよろしく、颯爽と里美のほうに歩いてくる。

彼は、創始者である現会長の孫であり、今年三十歳になった直系の御曹司だ。昨年六月までロ

ンドンの支社長を務めており、その後日本に戻ってきて営業部の部長を勤めたのち、今年四月に社長に就任している。御曹司とはいえ、血筋だけで社長になったわけではない。入社以来、その能力は各所で高く評価をされており、社長就任も当然の流れだった。

身長は、きつと百九十七センチ以上あるだろう。華やかなイケメンを前に、里美は多少の気まずさを感じている。

「後ろから見てたけど、さつきからジタバタとなにをやってたんだ？」

「あ、これですか？」

尋ねられて、里美はドアに向き直った。そして、軽く身体を揺すりながらステップを踏む。

「私って、自動ドアのセンサーに感知されにくいんです。普通に前に立つても反応しなくて。だから、毎朝こうやってドアが開くようセンサーに向かってアピールをして――、あれっ、まだだめ？」

自動ドアは、あいかわらずびくりとも動かない。

さすがに困り果て、里美はつま先立ってセンサーをまじまじと見つめた。すると、背後から健吾が近づき、里美の顔を上から覗き込んできた。

「だめみたいだな」

「うわわっ!」

驚いて仰け反ったところ、頭が後ろにいる健吾の胸に当たった。

「おっと――」

背後から支えられ、囘らずも顔が上下さかさまになった状態で見つめ合ってしまう。肩をそっと

押ししてもらい、ようやくまっすぐに立つことができました。

「す、すみません！　ありがとうございます」

健吾が背後に来たタイミングで、自動ドアはすんなりと開いている。

「どういたしました。ほら、開いたよ」

健吾の後をついてビルに入り、すばやくドアを振り返った。一步踏み出し、センサーの下に立ってみる。ドアはそのままびったりと閉じていった。

「丸山さん、なにやっているんだ？　エレベーター来たぞ」

先を行っていた健吾が、エレベーターのなかから里美に向かって手招きをする。

「あっ——、はいっ！」

急いでエレベーターに乗り込む。

「ありがとうございます。重ね重ねすみません——」

軽く会釈し、健吾に代わって操作盤の前に立った。

「いや、役に立てたようでよかった。しかし、あのドアセンサー、壊れているんじゃないのか？」  
後ろに流された髪が、襟足で緩く外巻になっている。額から顎にかけてのラインが、秀逸なギリシア彫刻のようだ。

「いえ、その点は心配はないです。自動ドアのメンテナンスは、毎回業者さんが完璧にやってくださっています。でも、なぜか私にだけは反応が鈍いんです。ちなみに、開きにくいのはこの自動ドアだけじゃありません。日本国中、どこの自動ドアも、もれなくあんな感じですから——あ、も

しかして世界規模かもしれません。少なくとも、ハワイはそうでした」

大学するとき、女友たちと四人で行ったハワイで、開かない自動ドアに思いつき額をぶつけたことを思い出す。

「へえ——、丸山さんって面白いな」

無意識に額を指でさする里美に、健吾は軽く笑い声を上げる。電子音が、八階への到着を知らせた。フロアにでたところで、健吾が立ちどまる。

「じゃあね、幽霊さん」

優雅に手を振ると、健吾は社長室へと歩いていく。

「えっ——は、はいっ、失礼します——」

たった今言われた言葉を、頭のなかで思い返してみる。

「社長、私のこと、幽霊さん」って言ったよね？　なんで社長がそんなこと知ってるの？」

「幽霊さん」というニックネームについては、別に秘密でもなんでもない。けれど、まさか社長までもが知っているとは、思ってもみなかった。

「——っていうか、私の名前まで知ってた！」

里美は、今さらながら驚き、ぱちぱちと目を瞬かせる。

入社して三年、同じビル内に勤務するようになってから一年弱になるが、これまで一度も健吾と目が合ったことはなかった。ましてや、さっきみたいにふたりきりになるなんて初めてだ。

総務部員として、会議のお茶出し等はあるから、まるで接点がないというわけではない。しかし

ながら、健吾が出席する会議では、関係部署の女性社員がすずんでお茶出しや資料配布をやってくれる。そのため、里美が出る幕はあまりなかったのだ。

健吾は、まだ若いにもかかわらず、すでに経済界で一目置かれる優秀な企業人だ。その上あれほどのイケメン。女性にモテるのも当然だ。だけど、里美は健吾を異性として意識したことなどないし、それは健吾だってそうだろう。というより、存在を意識したことすらないので？　と思っていた。なのに、その健吾が里美のことを知っていたのだ。社長というのはすごいんだなとつくづく思う。

デスクに到着しバッグを置くと、里美は早速毎朝恒例の社内巡回に向かった。

(あ、そうだ。昨日社長室の前のコピー機がトナー切れになってたっけ)

スタート地点は、里美のデスクからすぐのカフェコーナーだ。いつもどおりの経路をたどり、社長室前のコピー機の前で立ちどまる。背後にある全面ガラス張りの部屋は、まだブラインドが閉まっている。

(それにしても、社長がこんな時間に出社するなんて、珍しいな)

空になったカートリッジをコピー機から取り外し、新しいものを手に取る。それを片手に持ち、空いている手を腰に当てた。なかに入っているトナーを拡散するためには、カートリッジを何度か傾ける必要がある。

「やあっ！　とうっ！」

ごく小さな声を出しながら、カートリッジをゆっくりと振り回す。気分は、スローモーションで

敵を迎え討つ女剣士だ。なんとなく、ノリで一度やってみたら楽しくて、以降、これをやるのが里美の密かな楽しみになっていた。

「はい、これでよし……っ」と

交換作業を終え、ついでにコピー用紙を補充してまた巡回に戻る。ちらりと後ろを振り返ってみると、社長室は相変わらずブラインドが閉まっていた。

(よかった——。うっかりいつも通りのことしちゃってた)

さすがにさっきのを見られるのは恥ずかしくない。

「八階、準備オツケー」

そう呟くと、里美は鼻歌を歌いながら、七階に向けて非常階段を下りていった。

翌日の木曜日は、なにごともなく終わった。そして迎えた金曜日の朝。里美はまたしても自動ドアの前で、健吾に遭遇する。

「おはよう、丸山さん」

後ろから声をかけられ、里美は振り上げていた手をそのままに振り返った。

「あ。社長、おはようございます」

今朝の健吾は、前回よりも落ちていた色合いのスーツに身を包んでいる。相変わらず清々しいほどのイケメンぶりだ。

「今朝も自動ドアと格闘してるね」

「そうなんです。最近特にしつこく開かないんですよね」

しかし、それまで開かなかったドアは、健吾が近づいてきた途端、嘘のようにすんなりと開いた。なんだろう、この差は。身長差？ それとも、存在感の違いからくるものだろうか？

いや、そもそも開かないのは自分だけであって、誰も皆、普通に自動ドアを通り抜けていくのだ。里美は、大股で歩く健吾の後に従い、早足でホールを歩いていく。

「そうだ、昨日総務から回ってきた、社内スケジュール管理ソフトの導入の件だけど」

先日、ようやく申請書を再作成して、田中部長の承認をもらった案件のことだ。人事部長とのすり合わせが必要だと言っていたけれど、早々に片付けてくれたみたいだ。

「担当者欄に丸山って印鑑が押してあったけど、あれって君のことか？」

エレベーターに乗り込むと、健吾は里美のほうに向き直った。

「はい、そうです」

「そうか。ふうん、いいね、あれ。朝一で決裁するから、あとはよろしく」

思いがけない事前通告に、里美は笑顔になる。

「ほんとですか！ よかったです」。最初は役職者の方だけでも、と思ったんですが、どうせなら社員全員のスケジュールも閲覧できるようにしたいと思って。以前作っていたものを、急いで書き直したんです」

最初こそコストがかかるが、導入すれば一気に情報の共有化が図れる。それは、結果的に業務の円滑化にも繋がりが、メリットも大きくなるはず。

「添付されていた資料、なかなかよくできていたと思う。あれも君が作ったのか？」

「はい」

エレベーターが八階に到着すると、健吾は里美に先に降りるよう促す。恐縮しながら先を行く里美に、健吾が後ろから話しかけた。

「丸山さん。悪いけどコーヒーを淹れてもらっていいかな？ 俺と君のふたり分ね」

「あ、はい。わかりました」

デスクにバッグを置き、廊下向こうにあるカフェコーナーに向かった。そこは、健吾が社長に就任してすぐに、新たに設置されたスペースだ。

(なんだろう？ スケジュール管理ソフトの件かな)

あと一時間は誰も出社して来ないだろうから、健吾と話した後で巡回をしてもまだ時間的に余裕がある。

コーヒーを淹れ終わり、社長室に向かう。部屋のブラインドは上がっていて、ドアも開け放たれていた。

「失礼します」

ペこりと一礼して、部屋のなかに入る。モノトーンでデザイン性の高いデスクに、応接セット。窓際には背の高い丸テーブルと椅子が置かれており、健吾がそこに座ったまま里美を手招きする。健吾の前に淹れたてのブラックコーヒーを置く。総務部の一員として、各役員の飲み物の好みはきちんと把握していた。

「ありがとう。丸山さんも座って」

健吾は、ひと口コーヒーを飲み、満足そうに口元を綻ばせる。

「うまい」

そう言ったとき、健吾は黙ってコーヒーを飲み続ける。カップを手にしたまま、里美は部屋のなかをぐるりと見回した。

「社長室も、お引越し完了ですか？」

「ああ、もう終わったよ。会長の私物が、あと少し残ってるけど」

健吾が指さした先には、両手に抱えられるくらいの、つづらが置かれていた。蓋が開けたままになっっているから、中身が見える。

「あれ、ぜんぶ会長の私物ですか？」

一番に目についたのは、色とりどりの布でできたテディベアだ。

「ああ、そうだよ。趣味でテディベアを作ったりしてね。仕事の気分転換にいいらしいよ」

「はあ、なるほどです……」

里美は、いかにも頑固そうでしかつめらしい会長の顔を思い浮かべた。

（会長がテディベアを……。人は見かけによらないって、ほんとなんだなあ）

「会長宛てに送っておきましょうか？」

「いや、これは俺が持っていかなきゃいけないんだ」

健吾は、里美のほうに少しだけ身を寄せ、声を潜めた。

「——『わしの大事なものだから、お前自ら運んで来い』って言われててね」

ごく間近に、健吾の顔がある。至近距離にまで近づいた彼からは、ほのかに石鹸の香りがした。

「他にも、ルービックキューブや知恵の輪とかが入ってるよ。まるでおもちゃ箱だろ？」

これまで知ることなかった会長の素顔に、ちよつと驚いてしまう。

「ほんとですね」

里美は、これまで知ることなかった会長の素顔に、ちよつと驚いてしまう。健吾の前は、彼の祖父である幸太郎が社長職に就いていた。彼は、かつて一度社長を辞し、息子——すなわち健吾の父、正一にその座を譲っている。だが、病気による正一の急逝で、今年三月まで再度社長を務めていたのだ。しかし、いくら自社の社長とはいえ、一般社員である里美とのかかわりはほぼ皆無だった。そのため、里美は、幸太郎の人となりを知らなかったのだ。

「あの、お話というのは——」

「ああ、そのことだけ——。丸山さん、先週の月曜日、遅くまで残業してたでしょ？」

「はい」

「やっばり。それで、帰る間際に照明を消された、と」

「え？——そうですけど。でも、どうしてそれをご存じなんですか？」

「うん、実はあれ、俺の仕業なんだ」

「えっ、社長の？」

「そう、俺が消した。ごめん——でも、もちろんわざとじゃない。フロアをぐるっと見回してみて、

もう全員退社したと思っただけだから」

健吾の眉尻が下がった。端正な顔に、怒られる前の子供のような表情が浮かぶ。

「あれ？　なんか、可愛い——」

里美は、思わず顔を綻はなばせた。

「そうだったんですか。私も、フロアにはもう誰もいないと思っていました」

里美が笑うのを見て安心したのか、健吾の口元にも笑みが浮かんだ。

「それで、帰ろうとして照明を落とした。そしたら、フロアの端のほうから、音が聞こえてきたんだ。まさか人がいるとは思わないから、白いものが見えたときには我が目を疑ったよ。それから、暗闇にぼうつとした明かりがついて、それがオフィスをふらふらと動きだして——幽霊かと思って、ものすごく驚いたよ」

社長室は、里美のデスクから遠い。あの日キャビネットの前にしゃがみこんでいた里美は、健吾の位置からはまったく見えなかったのだろう。

「すみません。驚かせてしまいましたね」

「いや、丸山さんが謝ることはないよ。ほんと、ごめん。君のほうこそ驚いただろ？」

「いいえ、私なら平気です。もう慣れてますから」

「慣れる？　残業してて照明を消されるの、初めてじゃないのか？」

「はい、もう何度目か忘れちゃうくらいに。もちろん社長と同じで、みんな私がいることに気づかずやったことですよ」

本当に、もう何度照明を消されたかわからない。

「だからいきなり真っ暗になっても、そんなに驚かなくなってるんです」

「へえ」

健吾は、感心したように里美の顔に見入っている。

「私って、普段から存在感が薄いって言われるんですけど、仕事に没頭するとよけい気配が消えちゃうみたいで。物心ついたときからそうなんです。どこへ行ってもなにをしていても」

改めてそう口にする、自分のことながら、なんだかおかしくなる。しかも、話している相手は、存在感ありまくりのイケメン社長だ。里美は思わず小さく笑い声を上げてしまった。

「笑いごとか？　それで困ることとか、いろいろとあるだろうに」

健吾が、呆れたように眉尻を上げる。しかし言葉とは裏腹に、里美を見る彼の目は、明らかに面白がっていた。

「ああ——、自動ドアとかですか？　でも、それも含めていろいろと慣れちゃって、あまり気になりません。あ、でも、今回は引越したばかりだったし、ちょっと苦戦したかもです。いつもペンライトを常備しているから、足元は照らせていたんですけど、途中で田中部長のごみ箱を蹴飛ばしちゃって」

「ああ！　あのごろごろって音、ごみ箱が転がる音だったのか。急に変な音が聞こえてきたから、幽霊だけじゃなくて、妖怪まででたのかと思ったよ」

「妖怪って！　社長って、面白い方ですね」

「いや、面白いのは明らかに丸山さんのほうだ。ほら、この間だって、そのコピー機の前でカトリッジ片手に孫悟空のマネしてただろ？」

「えっ、見てたんですか!? 確か、あのとき社長室のブラインド、閉まっていたのに——」  
「いったいどこから見ていたのさだろう? 里美は、さすがに恥ずかしくなり、顔を赤らめて首をすくめた。」

「ぼつちり見てた。君が近づいてくるのが見えたから、脅かそうと思ってブラインドの隙間から様子を窺ってたんだ」

「脅かそうって……」

社長ともあろう人が、そんなことを企むとか。まるでやんちゃな小学生の男子みたいだ。

「なかなかサマになってたよ、レディ孫悟空」

「違います、あれ、孫悟空じゃありません! 一応、女剣士のつもりでした」

勢いよく抗議の声を上げたものの、言いながら恥ずかしくなり、里美の声がだんだんと小さくなる。健吾が横を向いて噴きだした。

「そこまで笑わなくても！」

そう思ったものの、健吾の笑い方は、見ている気持ちいいほど爽やかで、あつげらんとしている。

「まあ、孫悟空でもいいですけど。別に悪者じゃないし」

とうとう里美も、健吾につられて笑い出した。ふたりでひとしきり笑うと、健吾は口元を引き締

めて里美の前でかしまった。

「いや、失敬。女剣士——だったか。次からは、そう思いながら見させてもらおうよ」

「もう見なくていいです!」

笑い飛ばしてくれたからか、恥ずかしさはすっかり消えている。

「あ、そう言えば、社長。どうして私が『幽霊さん』って呼ばれているの、ご存じだったんですか?」

「ああ、あれは、たまたま田中部長と話しているときに聞いたんだよ」

「田中部長に?」

「うん、仕事の話を終えて雑談をしたとき、たまたま俺が見た『八階フロアの幽霊らしきもの』の話になったんだ。話すうち、田中部長が『それ、もしかして『総務部の幽霊さん』かもしれないよ』って言いだしてね。詳しく聞かせてもらったら、いろいろと合致したんだ」

それで納得した。健吾は、田中から里美の情報を得ていたのだ。

「総務部の幽霊さんなんて聞いたら、興味をひかれるだろ? 一度会ってみたくて、朝早く出勤してみた。そしたら、君が自動ドアの前で苦戦してるのを見つけたんだ」

「そ、そうだったんですか」

あの日里美が健吾に会ったのは、彼が意図的に待ち伏せていたからだだったのか。

(なるほどね)。珍獣を見たい、って感じだったのかな。それであの朝、あそこにいたんだ)

里美がひとり頷いていると、健吾の顔がぐっと近寄ってきた。

(ち、近いっ!)

さつきよりもだいぶ近い。石鹸の香りどころか、健吾の息遣いまで聞こえる。間近で見ると、健吾の肌の滑らかさがわかった。眉もきちんと整っており、凛々しいことこの上ない。

(うわ……、なにこのかつこよさ……)

思えば、こんな美男子は生まれて初めて見るんじゃないだろうか。それに、男性とこれほど近い位置にいるのも――

「俺とふたりきりになって、ここまで冷静でいられた女性って珍しいよ」

健吾の濃褐色の目が、里美をじっと見つめてくる。

「え？ あ……そうですか？」

「ふっ、そうですか？ って……。ほんと、君って面白いな」

健吾の顔が、そのままじわじわと近づいてくる。里美は、大きく目を見開いて、迫ってくる彼の顔を見つめた。見つめ合ううち、互いの顔が少しずつ左へと傾いていく。

(あれ……、あれあれっ……?)

里美のほうは、わざとそうしているわけではない。なんというか、健吾の気迫に押されたというか、ついつられて彼と同じ動きをしてしまっているのだ。鼻先の間は、距離にしておよそ十センチ。さすがに近すぎる――！ そう思った次の瞬間、健吾の顔がすつと離れた。

「これ、渡しておく」

健吾は、里美に小さなメモ用紙を差し出した。受け取ったふたつ折りの紙を開けると、そこには十一桁の番号が書いてあった。

「それ、俺のプライベートな連絡先だ。今度また、どこかの自動ドアがどうしても開かなくて困ったら、俺に連絡するといい。自動ドアに限らず、なにか困ったことがあったら遠慮なく電話してくれていいから」

「はい――？」

「俺が、もしものときの君の『オタスケレンジャー』になるってことだよ。知らない？ 『オタスケレンジャー』――俺が子供のころに流行ったアニメのヒーローだよ」

「あ、知ってます。それ！ 私も大好きでしたよ！」

「そうか。じゃあ話は早いな。電話してくれば『必ず君をオタスケレンジャー！』するよ」

健吾は、アニメヒーローそのままの台詞を言い、同時に決めのポーズまで真似て見せた。そして、呆気にとられている里美ににんまりと笑って見せる。

「これで、丸山さんの女剣士ごっこを見たの、帳消しにしてもらえる？」

「は？ ああ、はい。わかりました」

里美は、くりかえし頷きながら、込み上げる笑いを抑えた。イケメン社長がいきなりなにをするのかと思えば、盗み見たことへの償いだっらしい。

「よかった。じゃ、そういうことでよろしく。あと、コーヒーごちそうさま」

健吾は、里美に向かって軽く片目を瞑り、席へと戻っていく。

「いえ。では、失礼します――」

里美は、社長室をでて自分のデスクに戻った。社内巡回に行く前に、手のなかのメモ用紙を見つ

める。

（素直にいただいちゃったけど……。自動ドアが開かないくらいで、社長を呼んだりできないよ）正直、これを渡される意味がわからない。

（冗談かな？ でも、これって……）

見ると、書かれている番号は、緊急用として会社に登録されている社長の電話番号ではない。だとしたら、本当にプライベートな番号なのだろう。だけど、そもそもなんで総務部の一社員に興味をひかれたのは、わかった。でも、それだけでここまでするだろうか。

里美の頭のなかに、たった今終えたばかりの健吾とのやり取りがよみがえる。健吾は、想像以上に親しみやすかった。話しながら、うっかり「可愛い」なんて思ったのも事実だ。

だけど、彼は「ブラン・ヴェリテ」の社長であり、里美からしたら雲の上の存在だ。どう考えても、自分がこの先、この番号に電話をかけることなどないだろう。

里美はメモを手にしたまま、すっかり困り果ててしまった。

「うーん……。せっかくだいだいたんだもんね」

社長直々に渡された番号を、そのまま捨て置くこともできない。里美は、スマートフォンを取りだし、書かれた番号を「仕事関係」のフォルダーに登録した。

午後になり、里美はひとり地下倉庫に向かった。

「ブラン・ヴェリテ」は、二年後に創業五十周年を迎える。そして、先月行われた役員会議で、社

史を発行することが決まった。担当部署は総務部であり、来期から本格的な作業に取りかかることが決まっている。社史編纂を依頼する業者はまだ未定だが、必要なデータや資料は、事前に準備しておいたほうがいい。データ化されたものはすぐに出せても、問題はそれ以外のアナログな資料だ。何度かあった大がかりな引越しもない、行方不明になっているものも多い。それを倉庫から捜しだし、取りまとめておくのが、里美の仕事のひとつに加わったのだった。

およそ六十平米の広さがある倉庫は、壁の全面にびっしりと資料が保管されている。

里美は、普段から割と頻繁に倉庫を訪れていた。買い置きの事務用品や備品の類は、すべてここに保管されているからだ。

倉庫内のもものは、一応すべて段ボールに収納されている。側面にラベルが貼ってあり、中身もわかるようになってる。しかしながら、長い年月を経る間に、中身が替わっていたり、あるべきものがなくなっている場合だってあるのだ。

今日里美が捜しに来たのは、創立当初から作られている社内報だ。

「さて、取りかかるか」

捜し始めてすぐに、比較的新しい年代のものがでてきた。

「……一九九五年からのものは、これでよし、と……」

だけど、古いものがどうしても見当たらない。引き出した箱を点検して、位置を正しながらひたすら捜し続けた。ふと時計を見ると、もうじき終業時間であることに気づく。

「うわー、もうこんな時間！ さすがに腰が痛くなっちゃったし、今日はこれで終わりにしよう

かな」

そう思い、ぐっと背伸びをした拍子に、ポケットに入れていたペンライトが床に落ちてしまった。「あ——」

ころころと転がっていくライトを追いかけけるうち、ラックの下段奥に見覚えのあるつづらを見つけた。

「あれ？ これって……」

しゃがみ込んで引つ張り出してみると、朝方社長室で見たつづらと、サイズ違いのものらしかった。

「わあ、なんだか重みがあるつづらだなあ。これって、漆塗りかな？ さすが、会長のおもちゃ箱……じゃなくて、私物入れに使うものって感じ」

見ると、つづらの側面に「社内報在中」と書かれた紙が貼られている。なかを確認してみると、創立時から、一九九四年までのものが、きちんと整理された並びで入っていた。

「よかった。こんなところにあつたんだ。もう、捜しちゃったよ——」

一番上にあつたものを取り、ページを開く。それは、今から二十八年前のもので、当時社長職に就いていた幸太郎のインタビュ記事が掲載されている。ページの真んかに載せられているのは、若かりしころの幸太郎の写真だ。

「会長、若っ！」

それに、厳つい面持ちの現在に比べて、ずいぶんと柔らかな表情をしている。そして、それより

ももつと驚いたのは、彼の膝の上に座っている小さな男の子の姿だ。

「これ、社長だよね？」

その子供は、小さいながらも整った顔立ちをしており、いかにも利発そうにシャンと背筋を伸ばし笑っている。

「うわあ、社長ったら、すっごく可愛い……」

思わず目を丸くして見入る。インタビュはシリーズ化されており、その次の号では、健吾の父、正一を含む親子三代が、自宅の玄関前に勢ぞろいしていた。

記事には、会社設立に至るまでの経緯なども書いてあり、里美はいつの間にかそれを読むことにすっかり没頭していた。

「あ、社長、ここにもいた」

広げたページに、外国人スタッフに囲まれてにっこりと笑っている健吾を見つけた。彼の横には、両親が写っている。健吾は、父の正一がロンドン支社長を務めていた五歳から九歳までの間、ずっとイギリスで暮らしていた。そのため、健吾が話す英語はとても流暢で、ネイティブと変わらないくらいだ。

「あ、さすがにもう帰らないと——」

我に返り、周囲をざっと片付ける。

入り口に向かおうと歩きだしたところで、ペンライトを落としたままであることを思い出した。

「いつけない。忘れるところだった」

少し先に落ちているペンライトを拾おうと屈みこみ、それを拾い上げた瞬間、突然目の前が真っ暗になった。

「えっ……?」

伸ばした指先どころか、一ミリ先も見えない。あわてて目を瞬かさせてみるけれど、見えるのは墨色の闇ばかりだ。

「もしかして、また……?」

きつと、いつものようにいないと思つて電源を落とされたのだろう。一日ばたついていたし、デスクの上も片付けてきたから、もう退社したと思われても無理はなかった。

いつものこと。だけど、ここは倉庫だ。窓なんかなし、当然外からの光は一切入ってこない。さすがに一ミリ先も見えない状態では、気持ちが焦ってくる。急いでペンライトを灯し、目の前の一メートルほどの範囲を明るくした。ほつと安堵のため息をついて、明かりを頼りにそろそろと入り口に向かって歩きだす。ようやくドアの前にたどり着き、ドアノブを回し、前にぐつと押しながらドアを開けて――

「あ、あれっ? ——開かない……」

ライトに照らされたノブが、がちがちと音を立てる。だけど、いくら押ししてもドアはびくともしない。

「鍵、かかっちゃってる? ……あ!」

地下倉庫の鍵は、大本の電源と連動している。ドアの開閉は里美が持っているマスターキーで可

能だが、鍵穴はドアの外側にしかついていない。

いつもなら、倉庫で作業をするときはドアを開けっぱなしにしておくのだが、今回に限って、かけておいたはずのストッパーが外れてしまったらしい。

「や……やだ、これってかなりまずい状況だよね……」

ドアの前に、一度大きく深呼吸を試してみた。だけど、そこから導き出された答えは「倉庫に閉じ込められた」という非情なもの――

頭が今の状況を理解した途端、背筋を冷たい汗が伝い下りる。ドアには鍵がかかっており、社内にはもう誰もいない。マスターキーはここにあるけれど、ドアの内側にいる里美が持つていても、なんの役にも立たないのだ。

「そうだ、スマホ――」

スマートフォンは通常、勤務時間内であれば、電源を切つてバッグのなかにしまい込んでいる。だけど、今日のように離席することが多いときは、マナーモードにした上で緊急連絡用ということとで携帯しているのだ。ボタンを押し、ディスプレイを表示させた。時間は、午後九時二十五分。思ったよりも長く社内報に見入っていたみたいだ。

「わっ、あと五パーセントしかバッテリーがない――」

右上にある電池マークが、赤く表示されている。電源が落ちてしまう前に、助けを呼ばなければ。ビル管理を頼んでいる会社はあるけれど、時間外対応用の番号は登録していない。田中部長にかけようとも思ったが、今夜は家族で夕食すると楽しそうに話していたことを思い出した。

「警察？ いや、それはさすがに……」

できれば、大ごとにしたくない。迷った挙句、何人かの同僚に電話をかけてみた。だけど、金曜の夜だからか、誰ひとり繋がらない。

バッテリーはいよいよ残り少なくなり、あと二パーセント。画面を明るくしている今、いつ電源が切れてもおかしくない状態になってしまった。

「ど……どうしよう……」

広い倉庫だから酸欠になることはないだろう。だけど、日の当たらない地下倉庫だからか、夜になってだいぶ室内の温度が下がってきたみたいだ。普段割とあっけらかんと過ごしている里美だけなど、さすがに今は相当のストレスを感じている。いくらなんでも、このままここで朝になるのを待ちたくはない。ペンライトだって、朝までは持たないだろうし、もしかしてオバケが出ないとも限らないし――

そんなことを考えた途端、急に暗闇が怖くなってきた。どこから誰かに見られているような、今にも背後から肩をポンと叩かれるような――。それに、今日は金曜日だ。明日明後日と休日出勤する者がなければ、里美は月曜日までここに閉じ込められたままで過ごすことになるのだ。

「おっ……落ち着いて、里美……。平気……。きつと、大丈夫だから……」

ゆっくりと息を吸い込み、一呼吸おいて吐き出す。

とにかく冷静にならなければ――。そうは思うものの、気がつけば身体中ガタガタと震えている。今からでも警察に電話しようか。だけど、事情を説明しているうちにバッテリー切れになってし

まうだろう。それに、結局は鍵がなければ、扉は開かないのだ。  
(そうだ、社長――！)  
里美は、急いで健吾のプライベート番号を画面に表示した。もうあれこれと考えている余地はない。里美は、最後の望みをかけて健吾に電話をかけた。

『はい、もしもし？』

予想外にすぐに応答があり、ややエコーがかかったような健吾の声が聞こえてくる。

「社長、助けてください！ 私、地下倉庫に閉じ込められちゃって――」

そこまで言ったとき、通話が切れた。とうとう、バッテリーの残量がゼロになったようだ。画面が暗くなり、いくら電源ボタンを押しても、なんの反応もない。

「あ……」

これでスマートフォンを使つての救助依頼はできなくなった。残った光源は、ペンライトのみだ。思わずその場に座り込んだ里美は、やがて身体を近くの壁に押しつけて丸くなった。

(でてくれたのは、確かに社長だった。今のでちゃんと伝わったかな？ 倉庫だって聞き取れたかな。あ、でも……)

考えてみれば、健吾は里美の番号を知らない。あわてるあまり、名乗るのを忘れてしまった。健吾は履歴を見ても、誰がかけてきたのかわからないのだ。仮にかけ直してくれていても、もはや電話にできることはできない。

「ど……どうしよう……」

こんなときこそ、落ち着かなければ。里美は、以前受けた企業防災セミナーの内容を必死に思いだそうとした。けれど、まったく頭が働かない。

とりあえず落ち着こうと、ゆつくりと数を数えてみる。ペンライトの消耗を減らすために、目を閉じてスイッチを切ることにした。

（大丈夫。社長は、きつと来てくれる。だって、オタスケレンジャーだもの。『必ず君をオタスケレンジャー！』って言ってくれたんだから——）

頭のなかに、ポーズを決めた健吾の姿が思い浮かぶ。

（でも、私だってわかってなかったら？）

（大丈夫、わかってくれてるって！）

（だけど、金曜の夜だよ？ 十中八九デート中だし、彼女をほつといてまで、助けにくると思う。）頭のなかで、楽天的な自分と悲観的な自分が舌戦を繰り返す。

電話ではなく、SNSを使ったほうがよかったかも——。今になって、もっと効果的な助けの求め方が思い浮かんだ。暗闇のなかで目を閉じていると、周りの空気がずっしりと重くなったように感じる。

そんなはずはないのに、わけのわからない圧迫感まで感じ始めた。

やけに心臓の音が大きく聞こえる。

どのくらいそうしていただろうか。突然、閉じた目蓋の先に、オレンジ色の明るさを感じた。目を開け、天井を見上げる。

「あつ、電気がついた！」

あわてて立ち上がろうとして、じたばたと足がもつれてしまう。それでも必死になって身を起し、壁伝いに出口を目指す。しつかり歩きたいと思っているのに、気が焦るばかりで、足に力が入らない。

非常階段のドアが開く音が微かに聞こえてきて、誰かがなにか言う声が続いた。鍵を回す金属音がした後、ドアが開き、白いTシャツ姿の健吾が飛び込んでくる。

「うわっ！」

ドアの前に立っていた里美に、健吾がぶつかりそうになった。

「丸山さん！ 大丈夫か？」

そのまま両方の腕を掴まれ、下から顔を覗き込まれる。

「まさか本当に救助要請がくるとは思わなかった。平気か？ もう大丈夫だからな」

「し、しゃちょ——、ありがとうございま——つくしゅん！ つくしゅん！」

お札を言う途中で、くしゃみが連続で二回でてしまった。背中に回ってきた健吾の腕が、里美の身体をすっぽりと包み込む。

「お礼は後でいい。寒かったんだろ？ 身体、冷え切ってるぞ。どこか痛むところとかないか？」首を横に振ると、温かな掌が里美の強ばった肩をこしこしとさする。抱きしめてくる胸元から漂ってくるのは、柔らかな石鹸の香りだ。

「とにかく早くここをでよう。ぐずぐずしていたら風邪をひく」

健吾に寄りかかるようにしてゆつくりと歩く。肩を抱かれたまま、一階の駐車場まで連れていかれる。車の前に着くと、健吾が助手席のドアを開けてくれた。シートに座らされ、すぐさま出発する。足元から流れてくる温風が、じんわりと身体を温めていく。

「無事でよかった——」

車を走らせながら、健吾がほっとしたようにそう呟く。カーオーディオから聞こえてくる音楽が、耳に心地いい。

「寒くないか？」

「大丈夫です。あの……、社長、本当にありがとうございました。それに、申し訳ありませんでした。私ったら、ほんとどうしようもないおつちよこちよいで——くしゅん！」

「気にしないでいいよ。言つたる？ 電話してくれば『必ず君をオタスケレンジャー！』——するって」

運転中だからさすがにジェスチャーはなかつたけれど、健吾はおどけたように声を上げて、アニメヒーローを気取る。

「本当に助かりました。いくら電源を落とされるのには慣れてるからって、倉庫はきつかつ——はつくゅん！」

信号が赤になり、交差点の前で車が停止する。

「くしゅみが止まらないな。丸山さん、自宅はどこだ？」

「みなみ駅から徒歩十分のアパートです」

「そうか。じゃあ、とりあえず俺のマンションに向かうぞ。ここからすぐだから。本格的に風邪をひいてはまずいだらう」

「い、いいえっ！ そんなご迷惑をかけられません！ 私なら大丈夫です。このあたりで降ろしていただければ、電車で帰れますから——」

あたふたと乗りだした身体を、健吾の腕がそつと押しとどめる。

「なにを言つてるんだ。社長の俺が、大切な社員を中途半端に放り出せると思うか？」

「でも、社長——」

「いいからここは俺の言うことを聞いとけ。今の時間、電車は結構混んでるぞ」

時計を見ると、午後九時五十二分だ。ということは、真つ暗な倉庫にいたのは三十分ほどだったということになる。体感的には、もつと長い時間だったような気がしていた。

(社長、すぐ来てくれたんだ……)

運転席では、健吾がフロントガラス越しに空を見上げている。

「それに雲行きもあやしい。気温も低くなってるし、今外をうろついたら、確実に風邪をひく」  
穏やかだけど有無を言わさない健吾のものの言いに、里美はとりあえずシートに身体を戻した。

「なにより、今君をひとりにしたくない。きつと、自分が思っている以上にショックを受けているはずだ。とにかく、とりあえずぜんぶ俺に任せろ。いいな？」

健吾は、念を押すように里美のほうに顔を向けた。

「はい」

強引さのなかに、優しさがある。健吾の言葉に、里美は不思議な心地よさを感じた。

「あと十五分くらいで着くから、その間ちょっと寝てでもいい。ゆっくりしてろ」

「はい。ありがとうございます」

里美は、身体をゆったりとシートに預け、目蓋まぶたを下ろした。さつきとは違って、目を閉じていても街の明かりが微かに感じられる。暖かいし、とても快適だ。なにも考えず、ただぼんやりと座っているだけで、安全と安心をもらえる。身体中の筋肉も、徐々にほぐれていくような気がした。

「着いたぞ」

ごく近い位置で声が聞こえた。はっとして目を開けると、健吾の身体が里美の上に覆いかぶさるように迫っている。

「えっ、えっ？」

至近距離で目が合い、驚きのあまり全身がガチガチに固まった。カチリと音がして、シートベルトが外れる。

「よし。自分で降りられるか？」

「あ——、はいっ！」

あわてて起き上がり、助手席のドアを開けた。もう足元もふらついていないし、寒さも感じない。

「じゃ、行こうか」

頷いて、歩きだす健吾の後に続く。

(びっくりした……)

健吾は、シートベルトを外してくれただけだ。それに、思い返してみれば、倉庫をでたときのほうがずっと距離が近い——というより、密着していた。

今さらながら頬が熱くなり、胸がドキドキしてくる。地下駐車場からエレベーターに乗り込み、最上階を目指す。一階で一度ドアが開き、上品そうな初老の男性が乗り込んできた。垣間見えたロビーは、床面が大理石で、まるで高級ホテルのような佇まいだ。十五階で降りて、廊下の一番先まで進んでいく。

「はい、着いた。入って」

前を歩いていた健吾が、立ちどまってドアを開ける。

「は、はいっ……」

ここまで来て、急に落ち着かない気分になる。思えば、男性の自宅に招かれるなんて、これが初めてのことだ。

ガラス張りのドアを通り抜けると、その先は広々としたリビングだった。

「わっ……、すごいっ……」

里美は、思わず目を丸くして声を上げてしまう。

「適当にくつるいで。今なにか飲み物を持ってくるから」

健吾がキッチンに向かうと、里美は窓際に寄って、外を眺めた。

窓の外は、ゆったりとしたバルコニーになっており、置かれている観葉植物はどれもみな手入れが行き届いている。眼下には閑静な住宅街と、その向こうに広がる都会の夜景。

(すごつ。さすが大企業の社長って感じ)

「つくしゅん！」

大きくひとつくしゅみをしたとき、健吾がトレイを持ってやってきた。

「ほら、これを飲んで。温まるから」

手招きされるまま足を進め、L字形のソファの、短いほうに座る。差し出されたカップを受け取ると、温かな湯気から、レモンの香りがした。

ゆっくり、ひと口飲む。

「おいしい……」

「ジンジャー入りホットレモネードだよ。少しブランデーを垂らしてある。風邪のひきはじめにいいんだ」

里美の斜め前に、同じカップを持った健吾が腰をかける。

「災難だったな。だけど、あんなところでいったいなにをしていたんだ？」

「社内報を捜してたんです。新しいものは割とすぐに見つかったんですけど、創立からのものがないかな見つからなくて」

「社内報を？」

「はい。社史編纂へんさんをするのに、必要だっって言われて」

「ああ、二年後にでるやつか。で？ 結局見つかったのか？」

「はい、ありました。それ、今朝社長室で見たのと同じタイプのつづらに入っていたんです。あれ

も会長の私物なんですか？」

「ふうん？ そうかもしれないな。だけど、倉庫にあったってことは、会社のもの扱いでもいいんじゃないかな。今度祖父に聞いておくよ」

「お願いします。倉庫のなか、整理されているようで実は結構散らかっているんです。だけど、そのつづらのなかにはちゃんと年代別にそろっていて、創立から一九九四年のものまでが入っていました。インタビュー記事や、当時の写真がいっぱい載ってましたよ。ついそれに見入っちゃって、あの始末です」

健吾が、軽く笑い声を上げた。そして、その後でちょっと考えるようなしぐさをする。

「そうか、一九九四年……。その年って、祖母が亡くなった年だな」

「そうなんですか——。載っていた写真のなかに、会長の奥様のものもいくつかありました。奥様コラムのような記事も書かれています」

健吾は飲み終えたカップをテーブルの上に置くと、ソファの背もたれにゆったりともたれかかった。

「祖母が亡くなったのは、俺が七歳のときだ。当時俺はもうロンドンに住んでいたけど、祖母は祖父の出張に合わせたりして、遊びに来てくれたよ。祖父と祖母は、ものすごく仲がよくてね。小さかったけど、そのことはよく憶えている。たぶん祖父は、祖母の写真や書いた記事が載った社内報を大切に思って、別に保管していたんだろうな」

「そうですね。だとしたら、尚更大切に扱わないといけませんね。あれだけ捜して他にないってこ

とは、保管してある社内報はあれだけことでしょうから」

今でこそ国内最大級のアパレル企業である「ブラン・ヴェリテ」だが、設立当初は何度も倒産の危機を迎えていた。

「祖父にとつて、祖母は妻であると同時に、ともに苦難を乗り越えてきた戦友でもあるんだ」  
そう言うと、健吾は感慨深そうに頷いた。

「会社経営の厳しさは、俺も祖父や父から嫌というほど聞かされてきたよ。——俺が五歳のとき、父がロンドンの支社長になって、家族そろってイギリスに行ったんだ。そして帰国すると同時に、父は副社長に就任した。その二年後には社長になって、祖父は会長職に退いた。そのときも、ちょうど会社は傾きかけていてね」

「そうなんですか？」

「対外的には体裁を整えていたけれど、内情は火の車ってやつだったそうさ。父は立て直しに必死になり、結果会社は再建して、今まで以上に成長した。だけど、そうするなか、父は祖父と対立し、そのうえ夫婦仲まで悪くなった。両親は、俺が十六のときに離婚して、母はその後イタリアに行つて再婚した」

さらりと言つてのける割には、内容がかなり重い話だ。

創業当初の「ブラン・ヴェリテ」は、主に綿素材を使った、素材重視のホームウェアを中心に展開していた。生地と製造過程にこだわりがある分、価格はやや高めではあったが、それなりに固定

客がついていた。しかし、景気や流行のせいもあってか、その後経営状態が悪くなってしまう。そんな創業以来最大の危機を回避できたのは、正一が打ち出した大胆な社内改革のおかげだった。彼は、それまで主力ブランドだったホームウェアを切り捨て、時代に沿った斬新かつ売れるものを作り出すことに全精力を注いだのだ。

その改革は、幸太郎と正一の間には修復不可能な深い溝を生んだ。だが、結果的に正一の改革は大成功を収め、「ブラン・ヴェリテ」は企業として飛躍的に成長し、今に至る。

健吾は、その後もぼつぼつと自分と両親との関係について話し続けた。それによると、夫婦仲が悪くなったところから、健吾自身も両親とあまり口をきかなくなつたようだ。幸太郎は、そんな健吾をよく自宅に招き、夏休みなどはふたりで旅行にでかけたりしていたという。

「両親に関しては、どっちか片方が悪いってわけでもない。父は仕事人間だったし、母はそんな父に我慢できなかつた。どんどんすれ違つていった結果、お互い他に目がいくようになったりしてね」

「……いろいろと、たいへんだつたんですね」

「まあ、ぜんぶ過ぎた話だ。——つと、これは、オフレコで頼む。社史には載せなくてくれよ」  
健吾は、軽く笑つて唇の前に人差し指を立てた。

「はいっ、もちろんです！ 私、口は固いですから」

「結構。さてと……もう寒くないか？」